

日本の天然染料と家蚕絹を使った紬着物の  
展示と技法解説とデモンストレーション



黄八丈の糸を使ったカッペタ織の実演

山下 誉・芙美子

企画：角 寿子



助成：独立行政法人 国際交流基金

*International Symposium and Exhibition on Natural Dyes 2011 Europe*

国際天然染料シンポジウムと展覧会 2011 ヨーロッパ

会期：2011年4月25-30日、会場：ラ ロシェル、フランス

56カ国から524人にも及ぶ天然染料の研究者、芸術・工芸家、また企業や研究所、NGO等が集まり、研究や作品を発表、実技を行い、情報や意見交換を重ね、指針をまとめ、持ち帰った。

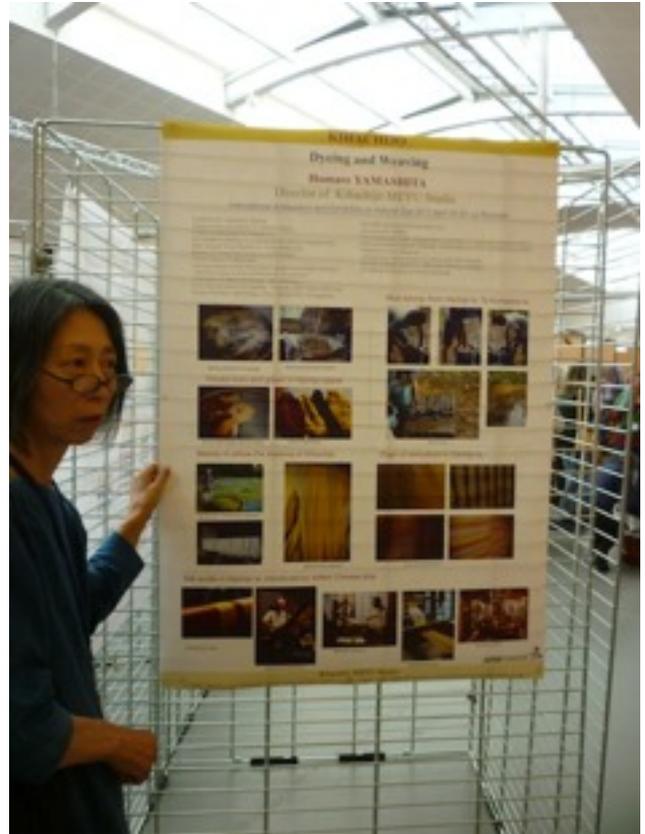


黄八丈は日本の家蚕である新小石丸種という糸を、島の染料植物であるこぶな草＝黄色、タブノキ＝樺色、シイ＝黒で染める染織技法である。会場では、八丈島の伝統的な織り方であるカッペタ織の実演と解説を行い、交流を行った。



ポスターセッション

黄八丈織やサフラン染めによる紬着物の染織技法、型染め技法の解説



地中海原産のサフランは料理用ハーブとしてフランスでも有名である。ポスターセッションでは竹田市の栽培法が独自であり、それが100年以上も前から行われていたこと、生薬・染色にも用いられていること、花びらまで使用することなどが注目された。



型染、日本の染料植物の解説

日本の型染は、和紙に柿渋を塗って耐水性をもたせた型紙に文様を小刀で切り取り、型にする。そして1枚の着物に数十枚の型を使用することもある。他の民族の多くは木に型を彫る。彩色も土と植物の顔料と染料を使い分けてきた。透明感のある染料は伝統的な着物から現代のストールや衣服に、顔料は主に絵画的色挿しに使われている。



染色デモンストレーション

神奈川県で育てた家蚕繭で作った絹真綿を北海道産の紫草の根（紫根）で染めた。紫草の自生種は日本では絶滅危惧種に指定されていること、持続可能な天然資源である染料植物と繊維の保全と栽培の必要性について、芸術と科学の視点から説明をした。ヨーロッパやアジアには同じ科のアルカネットやアルネビアがあり関心が高い。



出席者達から技法や材料についての質問を受けながら実演を行い、連日ポスターで解説した。紫根やテキストが欲しいとの要望が多く、現在、蚕を日本に輸出しているブラジルの出席者からも注文された。



展覧会

日本から着物6点と、帯4点を出展した。展覧会には他に世界各国からタペストリーやオブジェ、絵画、ドレスなどが出品されており、初めて日本の着物が国際天然染料シンポジウムで展示されたことになる。また、作者自らが自作を着て説明をした。色の美しさと強さに対応して、展示担当のデザイナーが自然光をあて、日本の様式の独自さが解るように展示をした。



黄八丈

藍緋



型染

紬



## 天然染料と家蚕絹

### アンジェ、パリ、リヨンの染織工房、美術館の見学と交流

#### アンジェ市のテキスタイル工房 (5月2日)

アンジェ城では1300年代に聖書をもとに制作された78枚のタピストリー「黙示録」を、テキスタイル美術館ではジャンリュサが戦後の復興と平和を願って制作した「世界の歌」を鑑賞した。また美術学校では様々な年齢層の学生がタピストリー制作を学び、街の様々な建物で、タピストリーが利用されていることを見聞した。



#### パリの国立ゴブラン織工房 (5月3日)

この工房で制作された新旧タピストリーの常設展示と現代タピストリーを制作している工房を見学した。



#### リヨン国際染織博物館(5月4日)

世界の染織品のコレクションと研究所があり、技法の分析、研究が行われている。研究員を訪問、館長が出迎えてくれた。





黄八丈 カッペタ織

協力：NPOアースネットワーク、黄八丈めゆ工房

材料協力：北海道医療大学(紫根)、橋口ともこ(絹真綿)

着物出展協力：氏田真弓、佐藤亜都子、鈴木富美子

ポスター出展協力：氏田真弓、佐藤亜都子、角玲緒那、矢出尚子

フランス語翻訳、通訳：角 那以瑠、*Fanny Vignal*